修士論文要旨

視覚的イメージの伝達コミュニケーションにおけるオノマトペと感覚モダリティの関連構造分析

The Relational Structure Analysis of Onomatopoeia with Sensory Modality for the Transfer Communication of Visual Image

青木　三枝（Mie Aoki）　　指導：松居　辰則

1　はじめに　視覚的イメージを言葉で伝えることは，意外にも困難である．このような場面においては，情報を網羅的に伝えるよりも，そのイメージの特徴を的確に説明することが重要と考えられる．そこで，本研究では効率的な情報伝達が可能と考えられるオノマトペに注目し，多義性を含む意味構造の解明を試みた．オノマトペは，五感で感受した情報を表現した言葉であり［1］，複数の情報を含意した豊かなイメージを持つ言葉である．したがって，本研究では，オノマトペと感覚モダリティの関係から，オノマトペの意味変容に関する特徴やプロセスを解明を試みた．

2　実験1　実験1ではオノマトペと感覚モダリティの関連性の概観のため基礎調査を行った．擬音語・擬態語4500日本語オノマトペ辞典[2]より視覚的イメージの伝達コミュニケーションに頻出する200語を抽出し，モーダル（視･聴･嗅・味・触）との関連を7段階評定のMD（Modal Differential）法［3］で求めた．被験者は日本語の一般的語彙力をもつ大学生58名を対象に4群に分け，共通語5語の平均評定値の相関係数で同質性を確認した．分析方法は関連性評定値によるマハラノビス汎距離を用いたward法でクラスター分析を行い7つに分類した後，意味構造分析法（Semantic Structure Analysis：以下SS分析）［4］を用いてSSグラフを描いた．

その結果，クラスター1は視覚･触覚（関連度がすべて低い），クラスター2は触覚・視覚・聴覚（聴覚関連度はやや低い），クラスター3は視覚・触覚（クラスター2と近似），クラスター4は視覚（視覚の関連度が高い），クラスター5は聴覚・視覚（聴覚が上端），クラスター6は視覚・嗅覚・味覚・触覚（4つのモーダルで関連度が高い），クラスター7は視覚・味覚・触覚（味覚関連度が高い）となった．

考察では「SSグラフの上端モーダルに着目し，意味を解釈する」とし，「上端に複数のモーダルがある場合それらの間で明確な区別がない」とし意味解釈を行った．その後，発話データの用例を確認した結果，上端のモーダルによって各クラスターの意味解釈が可能であることがわかった．さらに，初心者と熟達者のスキルに関して，絵柄の理解度と伝達スキルによりオノマトペの用法が変わるとの知見を得た．

3　実験2　実験2では，デザインスキル保持者を対象に実験1と同様の調査を実施し，比較を行った．被験者は，芸術大学学生及び専門学校生57名であった．実験2ではクラスター分析・SS分析共に実験1と同じ方法を用いた．

その結果，SSグラフによるとクラスター1で視覚（関連度がすべて低い），クラスター2･3は統合され触覚（触覚，視覚の関連度が高い），クラスター4は視覚（視覚の関連度が突出して高い），クラスター5は視覚，聴覚（等価関連），クラスター6は視覚（4モーダルが関連度が高い），クラスター7は触覚（味覚の評定が高い）が上端であった．

そして，実験2の考察では，実験1のSSグラフとの比較から意味解釈の妥当性を確認した．その結果，「関連度の高いモーダル（4.0以上）に各クラスターを特徴づけるモーダル由来の意味がある」「順序関連は，評定者のオノマトペの使用シーンが反映され，説明頻度の順位が推察可能」の2つの観点でSSグラフの意味の解釈を行うこととした．

一方，オノマトペは複数のモーダルの意味を含意し，そのモーダル間で修飾・被修飾され，共感覚的表現は近感覚から遠感覚，遠感覚から上位概念へと通様相性の理解可能性の方向性［5］に準じると考えられる．これらのことから，オノマトペは順序関連の上端と近接したモーダルへ意味拡張し，共感覚表現の出現を予測可能であるとの知見を得た．また，デザインスキル保持者はモーダルへの感受性が高く，それは視覚的イメージの理解に支えられ，オノマトペは豊かな伝達コミュニケーションを実現すると考えられる．

4　まとめと今後の課題　本研究では，オノマトペと感覚モダリティの関連構造からオノマトペの意味構造を考察した．その結果「オノマトペは複数のモーダル由来の意味を含意し，その意味的特徴はモーダルに意味が由来する感覚的語群と一般語彙に近い抽象的語群に大別され，さらに6種に分類される」「オノマトペは，近接するモーダル間で通様相性の理解可能性の方向性によって意味拡張する」「オノマトペの適切な利用には，利用者の視覚的イメージへの理解とオノマトペの意味的イメージを視覚情報へと転化するスキルが求められる」ことが示唆された．そして，今後の展望として，各クラスターの特徴を定量化する分析単位とオノマトペのイメージ可視化は重要な観点である．

参考文献［1］苧坂：感性のことばを研究する―擬音語・擬態語に読む心のありか，新曜社，p.4, 6, 1999.［2］小野：擬音語・擬態語4500日本語オノマトペ辞典，小学館，2007.［3］鈴木：モダリティ・ディファレンシャル法による形容詞対の感覚関連性の分析，心理学研究，77, 5, pp.464-470, 2006.［4］竹谷：評定尺度データの意味構造分析法，行動計量学会誌，14, 2, pp.10-17, 1987.［5］楠見：共感覚に基づく形容表現の理解過程について，心理学研究，58, 6, pp.373-380, 1988.